

つばさ川柳 願法みつる編 (143号)

『自由句』

卒寿の身何を今更悩もうか

藤沼 智弘

然もあらん防衛相の首が飛び

今更に将棋などとは思うけど

歩き食い教養人のマナー見せ

堀内今一步

小池丸船頭なしの舟子増え

女子サッカー何処かに置いた淑やかさ

若松 靖夫

付度に諂い含み気の遣い

ジェット音無いと猪鹿猿が来る

女房の下着をたたむ老介護

岩崎 篤子

老いて今逆から読めば十と八

生き抜いた良くも悪くも昭和の子

佐原 利幸

空蝉が今年が多い終戦日

持て成しの都度悩ませる松と竹

末田 洋一

どうしたのそつと近寄る悪い人

教育の現場で無知が身にしみる

谷井 修平

秋夜長独りの酒が身に沁みる

正直に生きて資産は少しだけ

努力してやっとなつかんだ代打席

高齢化過疎化が進むわが故郷

夏バテに追い打ちかける妻の愚痴

付度はされたくもない老いの道

老々が逝く順番を譲り合う

濱田 喜己

空元氣頑張った分きしむ骨

政界の信頼壊すペンと口

感動を求め久しい無為の日々

蜂巢 徹

打ち水に黄揚羽蝶のご来訪

高齢化台風までが長寿なり

軍神の社で隊歌奉り

願法みつる

走馬灯命をかけた釜の飯

無茶なこと酒で狂ったあれやこれ

課題 『からから』

みつる選

空蟬の風に吹かれる夕間暮れ

岩崎 篤子

ごつくんとからから喉が音を出す

若松 靖夫

からからの財布が集う飲み仲間

末田 洋一

長生きをからから笑い飛ばすかな

藤沼 智弘

ガラガラと崩れる身体老いる日々

濱田 喜己

ひび割れた田んぼに欲しい恵み雨

谷井 修平

ツケ払いしかない老いの空財布

佐原 利幸

秀 買い替えてみたが空っぽ冷蔵庫

堀内今一步

秀 我天狗カンラカラカラ笑いだし

蜂巢 徹

軸 千涸らびた脳に火の酒よく響く

願法みつる

「雑感 7」

先号に更に続いてまた、福田案山子氏の作品を紹介します。

ところで「折句」とはナンゾヤ。どの様に作るのか、川柳なのか・・・と言う類の質問が全くありませんでした。よって皆様はご存知なのだろうと思えますが。本当に宜しいですか。念の為少し書きますが、詳しくはブログや専門紙でお調べ下さい。

「折句」雑俳の各種形式のひとつ。短詩十七音字の場合、折句三字題が一般的。上句・中句・下句の句頭に一字ずつを置く。

「雑俳」とは、世相や風俗などを風刺したり、滑稽味をねらった短詩。本格的な俳諧に対して、雑多な形式と内容をもつ遊戯的な俳諧の総称。江戸中期に流行。

課題「川」

寄り添って溪流を聞く宿浴衣

黒雲に追われて中洲から逃げる

課題「顔」

湯上がりの妻の笑顔が魅力的

無防備な顔が並んだ終電車

折句「かつお」

帰り道疲れを癒す朧月

片方の都合も聞いてオンにする

課題「希望」

一割の成功率に賭けるオペ

現実となりそう重力の旅

課題「着る」

記念日に集う樟脳漂わせ

遠慮なくメタボを晒す試着室

折句「きそう」

究極のソムリエ目指す腕が鳴る
気晴らしに空を仰げば歌が出る

課題「組む」

敵の敵ならば仲間に誘い込む
腕組んで夢語り合う青い月

課題「果物」

夏バテの胃の腑西瓜に癒される
誕生のケーキ苺を先ずつまみ

折句「くせつ」

くたびれた背中が苦勞連れてくる
挫けずに背筋を伸ばす杖歩行

課題「現役」

現役の頃懐かしむ梯子酒
往年のキャリアを活かすボランテイヤ

課題「化粧」

働いた化粧を落とすバスルーム
幼児がママのルージュを塗りたくる

折句「けしき」

携帯で祝意を告げる菊日和
懸命に仕事一途の今日を生き

次号の課題は「きらきら」です。課題句二句と自由句三句を
ご投稿下さい。締切は十一月末日です。